

〔ヨーロッパ流文學概念(「彼我の差」圖)の鷗外的展開(以下圖)を考察する〕:「鷗外・漱石の意識してみたものは、彼等の言説のいかにいかはらず、要するにヨーロッパ人になることであり、ヨーロッパ精神を身につけることであり、さらにヨーロッパ流の文學概念(「彼我の差」圖)を確立しようとするにほかならなかつた」(『文學史觀の是正』P358)。
 *「彼等(鷗外・漱石)がともに西歐文學の傳統を深く理解してみたこと、この傳統のそとには自己の作家活動はもとより個性の完成すらもちえなかつたことが考へられる」(『近代日本文學の系譜』P20下)。その敷衍が以下の展開圖か？

B「個人の純粹性」

*藝術(B)は惡から汚水を吸いあげて美しい花を咲かす」(P(参照『自己劇化と告白』全二P407)
 *「彼等の作品(B)はあらゆる夾雜物を濾過し去り(A的なもの・惡の汚水をBから吸ひ上げ)、最後に文學(B)をもつてしか解決しえぬ問題(個人の純粹性B)——文學(B)のみがこれを扱ふ問題が純粹な形(個人の純粹性の靜謐)で残りえた(つまり「美しい花を咲かす」)」(『近代日本文學の系譜』P20下)
 ~~~~~  
 \*「B:個人の純粹性の靜謐」=「美しい花を咲かす」

### 〔C:彼我の差〕

\*フローベール(理想人間像C)と鷗外(道德そのもの=天C)。  
 \*「鷗外・漱石は(江戸幕府の文化政策でしかなかつた儒教の)封建道德の背後に道德そのもの(本質としてのB⇒C天)を見てゐた」(「自己劇化と告白」P417)。

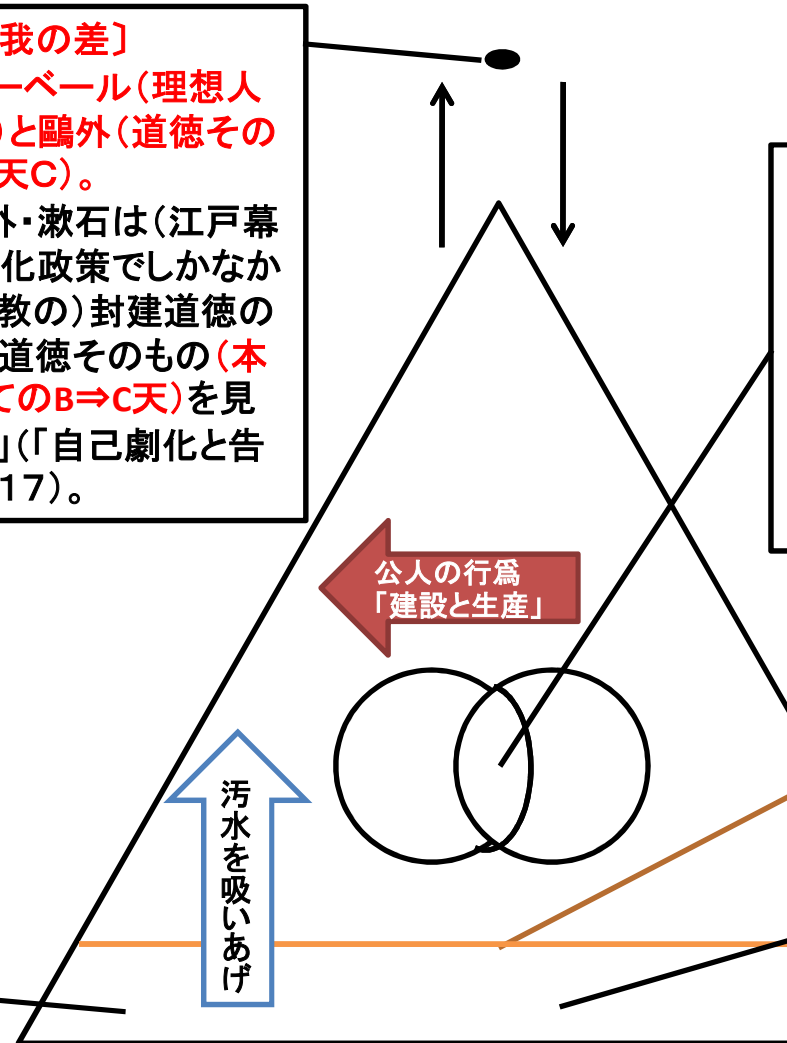
### A的(現實的)客體化:

「A 旧限定 ⇐ A' 公人」

\*意志的行爲(A' ⇒ A)」として義務を果たす事。それによりかへつて「戈をまじへる事なく」、旧規範・旧限定から自己が隠蔽される。

精神の政治學ラインの最下降化=「緩衝地帯をこしらへる」と言ふ事か？

B:「天は、完全な精神としての抽象化を受ける。その精神が鷗外における文學(B)の領域」とは言へるか言へないか？  
 ⇒左文:B「説明文」参照



「自分の中にある、**武士の気持ち**(**背後の道德=C**儒教道德・武士道)と西洋文化、この二つの生き方をどうしたらいいのか。**これ**を捨てるのか、あるいは保持していつたらいいいのかといふ、鷗外の西洋化した新しい目から見たら否定しなければならぬやうなもの、しかしそれにも魅力を感じて時代に叛逆しながらそれを何とか維持**B**しようとしてゐる、一所懸命それに耐へてゐる(**B**)といふ感じ、**それが『澀江抽齋』**なんかにはあらはれゐる」(『福田恒存対談座談集』第四P13)

### B「個人の純粹性」

「彼の歴史に對する情熱は『かのやうに』五年後に史傳といふ新しいジャンルを開發した。彼は『妥協』した(傍觀者になつた)のではない。新思想(『フィクション』の哲學)の尖端を歩みながら、封建時代の傳統の重み(背後の道德=C儒教道德・武士道)に堪へてゐたのである」。何故なら、明治に残存する「いはゆる封建道德」の「背後に道德そのもの」を鷗外は見る爲に、と恒存は言ふ。自己の夢想(C: 儒教道德・武士道・天)が激しいと同時に、かつ明治に未だ残る「いはゆる封建道德の背後に道德そのものを鷗外は(漱石も)見てゐた。生きてゐる人生の眞實を見てゐた」。それが爲に耐へてゐたのだと。(全二P417『自己劇化と告白』)

上述の「武士の気持ち(背後の道德=C儒教道德・武士道・天)」…明治に未だ残る「いはゆる封建制度の背後に道德(C)そのものを鷗外は(漱石も)見てゐた。**生きてゐる人生の眞實**を見てゐた」。つまり、『澀江抽齋』に「**生きてゐる人生の眞實**」を鷗外は見た、と言ふ事であらう。

### 「A 素材— A' 自己」

「ひと(A')は素材(A)以外にはたして一歩でもでることができようか。ひたすら素材に忠實にたらしとするものをのみ、素材(A)は導いてゆく。素材の必然に随つて一歩一歩着實に歩む以外に偶然(A')の溝を越す方法はない。そして、この必然の尖端がすなほに偶然(A')と相接(A' ⇒ A: 客體化)するとき、詩が、いささかも虚構の跡をとどめない眞實の詩が光を放つ」(〔難解又は重要文〕P513下)

精神の政治學ラインの最下降化＝  
「緩衝地帯をこしらへる」と言ふ事か？

B:「天は、**完全な精神**としての抽象化を受ける。**その精神が鷗外における文學(B)の領域**」とは言へるか言へないか？

自己劇化  
實在感

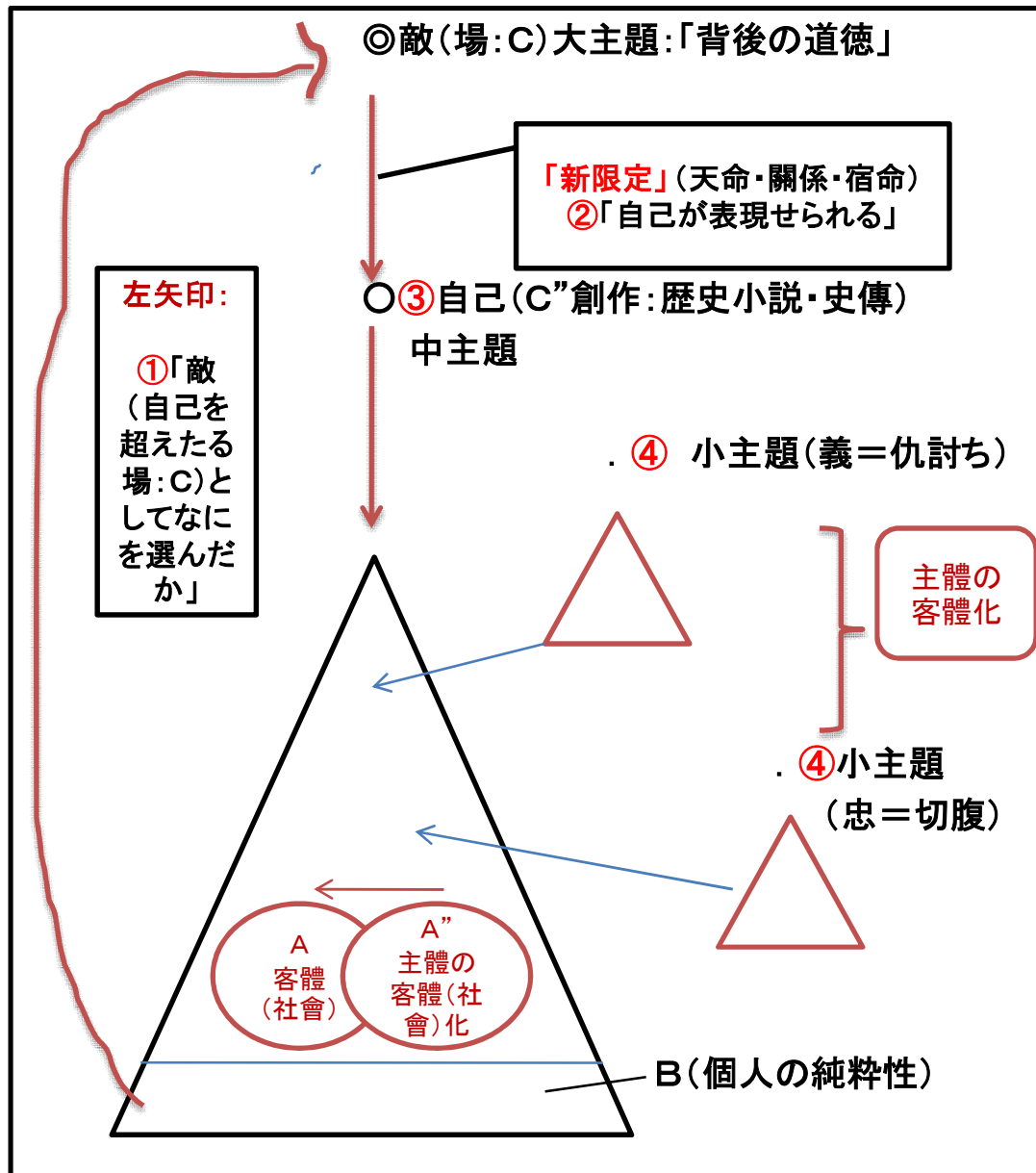
「素材Aの必然に随ひ歩む」

汚水を吸いあげ

「われわれが敵（自己を超えたる場：C）としてなにを選んだかによつて、そしてそれといかにたたかふ（宿命/自己劇化）かによつて、はじめて自己は表現せられる（創作対象に）のだ。…」⇒図解次頁

| 各文人別<br>「われわれが」 | 大主題（C）の発見：<br>「敵（自己を超えたる場）」 | 「新限定」<br>（天命・関係・宿命）<br>「としてなにを選んだか（宿命選擇）によつて」 | 中主題（C” 文學）の創造：<br>「そしてそれといかにたたかふ（宿命/自己劇化）かによつて、自己が表現せられる」 | 小主題の創作<br>「表現せられる（創作対象に）」即ち「現實的客體化」               |
|-----------------|-----------------------------|-----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| 森鷗外             | 「背後の道德」                     | 天命（儒教道德＝至誠・武士道）                               | 歴史小説・史傳                                                   | 義＝仇討ち＝『護持院原の敵討』・忠＝切腹＝『堺事件』・孝＝『高瀬舟』・全般＝『渋江抽斎』等々    |
| 漱石              | 「背後の道德」                     | 天命                                            | 「自己本位」<br>（彼我の差に踏み留まる？）                                   | 小主題（『私の個人主義』・各小説他）                                |
| 二葉亭             | 「國家」＝Cの代はり                  | 國命                                            | 國士として活動                                                   | 洋行                                                |
| ルソー             | 「神」                         | 神意                                            | 『告白録』                                                     | 神・C：「思想に自己を賭けた」描写 P 4 1 4 下                       |
| フローベール          | 夢想（理想人間像）                   | 神意                                            | 近代自我（個人主義）否定                                              | 『ボヴァリー夫人』他。（神・C・夢想「思想に自己を賭けた」描写。しかし、夢想は作品には登場しない） |
| チャーホフ           | 「空家（神不在）」にたへる               | 「無執着」「底意のない眼」                                 | 近代自我（個人主義）が自己解釈「獨り合點」する意識（D 3）を「在るがままに描く」                 | 各戯曲・小説 他                                          |
| ハムレット           | 先王の亡霊（C：王權神授）               | 君命：王權奪還「關節を治す」                                | 復讐                                                        | 各章：「めまぐるしく行動しながら、意識の世界では（敵・新限定から）一步も動かず」          |
| 恆存              | 絶對・全體                       | 誠實                                            | 「関係と言ふ眞實を生かす」＝フイクション                                      | 文學評論・演劇・政治論 他                                     |

《本文9頁》:敵(自己を超えたる場C:例「天」)⇒關係・宿命(D1例:天命)⇒自己(C")の活動(例:鴉外「歴史小説」)・・・以下構圖の、「完成せる統一體としての人格」論(テキストP10圖)、及び演劇論(テキストP11圖)との相似形に留意されし。即ち①⇒②⇒③⇒④の流れに。



\* 左圖を詳細に記すと、鴉外の場合は以下の通りとなる(拙文『口邊に苦笑』参照)。

大主題(C)の發見「背後の道德」⇒天命・宿命・新限定⇒中主題(C"文學:歴史小説・史傳の創作)⇒小主題:客體化(義=仇討ち=『護持院原の敵討』・忠=切腹=『堺事件』・孝=『高瀬舟』・全般=『渋江抽斎』等々の創作と言う能動となる。

\* それぞれの「大主題(C)」の發見⇒中主題(C"文學:歴史小説)の創造⇒小主題

・漱石の場合は、  
大主題(C):「背後の道德」⇒天命・宿命・新限定⇒中主題C"「自己本位」(彼我の差に踏み留まる?)⇒小主題(『私の個人主義』・各小説他)。

・ルソーの場合は、  
大主題(C):「神」⇒神意・宿命・新限定⇒中主題(C"『告白録』)⇒小主題(神・C:「思想に自己を賭けた」描写 P414下)

・フローベールの場合は、  
大主題(C):夢想(理想人間像)⇒神意・宿命・新限定⇒中主題(C")近代自我(個人主義)否定⇒小主題(『ボヴァリー夫人』他。(神・C・夢想「思想に自己を賭けた」描写。しかし、夢想は作品には登場しない)

・ハムレットの場合は、  
大主題:先王の亡霊(C:王權神授)⇒君命・宿命・新限定(王權奪還「關節を治す」)⇒中主題(C"):復讐⇒小主題(各章:「めまぐるしく行動しながら、意識の世界では(敵・新限定から)一步も動かず」)

・二葉亭の場合は、  
大主題(C):「國家」⇒國命・宿命・新限定⇒中主題(C"國土として活動)⇒小主題(洋行)

・恒存の場合は、  
大主題(C:絶對・全體)⇒關係・宿命・新限定(誠實)⇒中主題(C"「關係と言ふ眞實を生かす」フィクション):⇒小主題(文學評論・演劇・政治論)

・チエホフの場合は、  
大主題(C):「空家(神不在)」にたへる⇒宿命・新限定(「無執着」「底意のない眼」)⇒中主題(C")近代自我(個人主義)が自己解釈「獨り合點」する意識(D3)を「在るがままに描く」⇒小主題(各戯曲他)